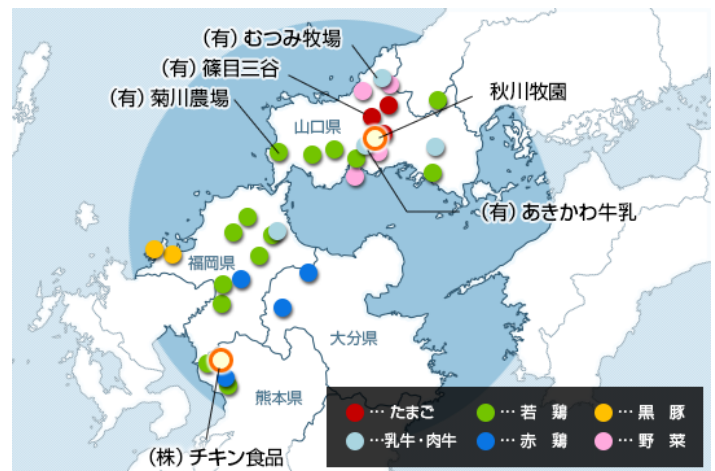


## 「循環型・秋川牧園の取り組み」

### 1. 秋川牧園の概要の紹介

「1 個の卵から健康で安全なものをつくる」ことをモットーに 1973 年、今から 50 年前に創業。秋川牧園の原点は「口に入るものは間違っていない」という祖父・房太郎氏の言葉がある。この言葉は食をあつかう自分たち自身への戒めの言葉。



### ★現在つくっている品目

卵から始まったが、鶏肉がメイン事業となった。鶏肉、豚肉、牛肉、無農薬、有機野菜も扱っている。本当の意味で豊かで賢い暮らしをつくりたいという思いがある。添加物不使用の冷凍焼き鳥、チキンナゲット、唐揚げなどが人気。



### 生産から加工まで自社で



## 2、若鶏の無投薬飼育

秋川牧園は1坪（畳2枚）35羽を飼育している。業界平均が1坪60羽ほどだ。特徴は無投薬で、抗生物質を使わずに鶏を飼うことにチャレンジして30年以上がたつ。これは日本で初めてのことだった。

最初は飼育した鶏を食肉に加工のために出したあとに、鶏舎の中に残っていた鶏糞を出して水洗いし、その後消毒して限りなく無菌状態にしてから木のチップを敷いてヒヨコを入れていた。だが今は鶏を出したあとに、鶏舎で鶏糞を四つか五つの山にして発酵させる。発酵で発する熱は70度にもなり、その熱でブドウ球菌やサルモネラ菌、大腸菌などの悪玉菌が死ぬ。さらにそこに熱に強い善玉菌といわれる納豆菌や乳酸菌などを加えることで、それらの菌が増殖する。当初の無菌状態をつくる発想から真逆の発想に転換し、よい菌を増殖させることで鶏が病気になりにくい健康な鶏を育てる飼い方を試行錯誤の末に確立した。



←若鶏生産  
～全期間無投薬飼育  
を日本初で確立～

鶏卵農場→



## 3、飼料米のとりくみ

飼料は肉骨粉や油脂といった動物性原料は使っていない。最近は飼料米に力を入れている。2009年から飼料米生産をはじめ、14年間でじわじわと面積が広がり、155㌔まで拡大、1000トンを超える収穫ができた。24の農家とチームを組んでやっている。この飼料米生産が農水省の「多収穫日本一コンテスト」で1位となった。

輸入飼料に頼らず、飼料米を生産して、化学肥料の代わりに鶏糞を使っている。

## 4、化学物質の海

化学肥料や農薬をできるだけ使わない農業が広がった方がいい。地球の歴史は46億年、生命の歴史は40億年の歴史がある。私たちの身体のDNAはサルの時代から進化してきた長い歴史がある。農薬やプラスチックや添加物が開発されたのはせいぜい100年。「マラソンに例えると、100年は42・195㌔の1ミッドしかない」と父が言っていた。

有機農業は食べる人の健康面を中心にいわれていたが、これからは地球環境の面から有機農業が大事だ。



## 5、サステナブル（持続可能性）を考える

私が考えるサステナブルにとって必要なことは、「1、未来への責任」「2、共に生きる」「3、循環」「4、元気で活力がある」

## 6、秋川牧園の課題

飼料原料を7割ほどは輸入に依存が課題。エネルギーの自給やプラスチックへの依存も課題。

## 7、消費者としてどう行動すべきか？

①毎日の食を大切に、②消費することで応援する、③食べ方をちょっと見直す